



## 認知症とともに生きる

看護実践開発研究センター長  
看護学部長

山崎 尚美

今年に入って早々に、令和6年能登半島地震が発生いたしました。

亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。

さて、今回は、認知症に関する話をお伝えしようと思います。私は令和5年4月に四天王寺学園とご縁を頂きまして四天王寺大学看護学部に着任しました。

看護学科では、開学時コロナ前からシミュレーションセンターを設置し、コロナ禍もシミュレーション学修に切り替えるなどして臨地実習を止めることなく継続することができていました。このことは設置準備室から「先見の明」をもって最先端のシミュレーター機器など整備され、完成年度までご尽力いただいた皆様のお力の賜物だと思ひ、感謝の言葉しかありません。

先見の明とは「何かが起こる前にそれを見抜く力」「先を見通し、それに対応する能力」「先を見抜いて判断する能力・行動する能力」とされています。

私は看護教員になってから老年看護学、特に認知症ケアに関心を持ち、歳を重ねることや認知症になることを恐れなくてよい地域共生社会を創るために教育や研究活動を行っています。このことを認知症に置き換えて考えてみますと、認知症に罹患することを誰も予測はできませんし、必死に認知症にならないように認知症予防に頑張っても歳を重ねれば皆、認知機能は低下してきます。しかし、認知症予防は歳を重ねないことと同じであり、人間生まれたら1年に1歳ずつ歳は増えていくのだから不可能なことです。むしろ、たとえ認知症になったとしても周囲の人の理解があり、尊厳をもって自分らしく共に生きていくことができたなら、幸せなのではないでしょうか。これから認知症者は増えていく時代に認知症カフェや認知症ケアのグローバル化、IT化に対応できる人材育成のために、これから地域で認知症の啓発活動を行う学生サークル「Orange Project®」を創り、地域住民や学生および院生とともに活動できることを切に願っています。「認知症とともに生きる IBU・認知症にやさしい四天王寺大学」を目指して精進いたします。



## 大学時代に学んだこと

入試・広報課長

小川 浩二

四天王寺大学にご縁をいただいたのは、30年以上前の大学受験に遡ります。数多くの大学がある中で、四天王寺大学を志望したのは、仏教教育に理解のあった高校の先生からの勧めでした。今でもその先生にはとても感謝しています。大学時代に学んだ聖徳太子の「和の精神」は、その後の私の人生に大きく影響を与えます。日々の生活や仕事において窮地に陥る状況が幾度とありましたが、その都度、目標や目的に向かって、家族や上司、仲間が助けてくださり、共に乗り越えていくことができました。まさに、和の精神の実相であり、日々の生活や周りにいる方々に感謝する気持ちを忘れないようにしてい

ます。また、「利他の精神」は、他人に対して思いやりの心を持つことを教えていただきました。もちろん、様々な方々と仕事や物事を進めていく上では必要不可欠なことです。まず自分自身から人を思いやって行動を起こすことで、周りの見え方も変化するのだと、様々な場面で実感しています。

現在は、大学事務局の入試・広報課において、学生募集活動や入学試験など、入学生受け入れの窓口となる重要な役割を担っています。しかしながら、少子化の影響は大きく、来年度入学生となる18歳人口は、関西で6千名以上が減少する厳しい環境となっています。また、受験生の大学選択における情報取得方法の多様化に対応し、インターネットやSNSが新たな広報手段に移り変わっていますが、時代が変わっても変化しないのは対面広報です。受験生や保護者、高校教員と直接向き合い、相手のことを思って広報することで、本学の本質を理解してもらうことができます。入学前に、直接話しをした学生から声をかけてもらえた時は、学生募集活動に携わる者として感無量です。今後も「和の精神」「利他の精神」を胸に刻み、与えていただいた職務を全うしてまいります。

## ❖ 学園訓「誠実」について

文学部

国際コミュニケーション学科講師

上野 舞斗



四天王寺学園の学園訓には「誠実を旨とせよ」という項目があります。「誠実」とはどのようなことを意味するのでしょうか。「誠実」はなぜ大切なのでしょうか。どのような心がけによって「誠実」になれるのでしょうか。辞書的な定義やその語源、また著名人や聖徳太子の言葉などを手がかりに考えてきたいと思います。

2種類の辞書で誠実という言葉を引き比べてみます。すると、「偽りがなく、まじめなこと。真心が感じられるさま。⇔ 不誠実。」(『大辞泉』第2版)、「言動にうそ・偽りやごまかしが無く、常に良心の命ずるままに行動する様子だ。」(『新明解国語辞典』第8版)と記述されており、ここには「偽りがなく」「真心・良心」という共通点が見出せます。「誠」という文字は、「言」+「成」から構成されており、これは「物事を成す偽りのない言葉」、すなわち「言葉を見せかけではなく真実にする事」(言行一致)を意味します。

次に「誠実」を大切にされた著名人についてみてみましょう。ここで紹介するのは、京セラ、第二電電(現KDDI)を創業したり、日本航空の再建をリードしたりと、その数々の功績から「経営の神様」と呼ばれた稲盛和夫氏(1932-2022)です。経営の神様は経営者として貫くべきことを「経営十二条」(『経営12カ条 経営者として貫くべきこと』、2022)として整理しており、ここに「思いやりの心で誠実に」が含まれています。他には「売り上げを最大に、経費を最小に抑える」といった具体的方策が挙げられているにもかかわらず、なぜ「誠実」がこの中に含まれているのでしょうか。稲盛氏は、自分の利益のみを考え、相手を泣かせるような経営は、短期的にはうまくいっても長期的にはうまくいかないことを指摘し、その上で、人々を広く思いやる優しさで誠実さによって、ともに繁栄を目指すことが必要であると述べています(『新しい日本 新しい経営』、1994)。つまり、稲盛氏によると「誠実」が長期的繁栄のために必要なのです。ここには自分だけでなく相手の利益も考える「自利利他」の精神が見え隠れします。

では、聖徳太子は「誠実」についてどのように言及しているのでしょうか。十七条憲法に、これに関連する2つの条項があります。1つ目は第六条です。紙幅の関係から現代語訳のみ紹介します。「悪を懲らしめ、善を勧めるということは、昔からのよいしきたりである。だから他人のなした善は、これをかくさないで見えるようにし、また他人が悪をなしたのを見れば、かならずそれをやめさせて、正しくしてやれ。へつらったり、嘘をつく者は、国家を覆し滅ぼす鋭利な武器であり、人民を絶ち切る鋭い刃のある

剣である。また、おもねり媚びる者は、上司に対しては好んで部下の過失を告げ口し、また部下に出会うと上司の過失をそしめるのが常である。このような人は、みな君主に対しては忠心なく、人民に対しては仁徳がない。これは世の中が大いに乱れる根本なのである。」2つ目は第九条です。「何ごとにも真心が大切である。何ごとを為すにあたっては、真心をもってすべきである。善いことも悪いことも、成功するのも失敗するのも、かならず真心があるかにかかっているのだ。人びとがお互いに真心をもって事にあつたならば、どんなことでも成し遂げられないことはないはずである。これに反して人々が真心を失ってしまうならば、あらゆる事柄は、結局のところ失敗してしまうものなのだ。」これらが冒頭に紹介した辞書の定義に見られる「偽りがなく」「真心・良心」に通底していることに気づかれた方も多くでしょう。

では、「誠実」であるためにはどうすればよいのでしょうか。儒教、仏教の考え方からヒントを得たいと思います。儒教は仏教よりも先に日本に伝わっており、太子も儒教に通じていたと考えられ、「十七条憲法」にもその片鱗が確認されます。儒教の代表的なテキストの一つである『中庸』には「上司に信じられるためには友人に信じられること、友人に信じられるためには親に従順であること、親に従順であるには自分自身を反省して誠実であることが重要」と書かれています。その上で、誠実であるためには「[自分の本性が善であると自覚して、目標となる]善を明確に知ること」(『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典 大学・中庸』、2016)が重要であるとしています。凡夫である我々がどのように「誠」を会得すれば良いのか。その答えとして、『中庸』では、善を明確に知ること「広範な領域の学習」と「諦めない努力・地道な勉強の継続」が提示されています。

しかし、「広範な領域の学習」と「諦めない努力・地道な勉強の継続」の結果として、何が善であるかを知っていても、うまくいかないことがあるかもしれません。たとえば、みなさんが街を歩いていて道にゴミが落ちているのを見つけたとしましょう。そんなときに「ああ、誰がこんなところにポイ捨てしたのだろう。拾おうかな。でも、拾ったら手が汚れるな。まあいいか」と思うてしまうことはないでしょうか。この場合、自分ではゴミを拾うことが善だとわかっているのにそれが実行できない状態にあります。どうすればよいでしょう。ここで釈迦の最後の言葉とされる「不放逸になるよう、励みなさい」に手がかりを求めます。「不放逸」とは不注意でないこと、すなわち油断していないことを指します。さらに言い換えれば、「今、ここ」に気づき、注意を払うことです。ここではどんな瞬間でも簡単に汚れます。だからこそ、こころが汚れないよう、「今、ここ」に注意を払い、感情の奴隷ではなく、理性によって生きようとするのが重要です。これによって、自分が善と信じることを実行し、「言葉を見せかけではなく真実にする事」ができるかもしれません。「和の精神」をはじめとする大学の学修の中で、善とは何かについて考えつつ、同時に「今、ここ」に注意を払うことが「誠実」になるための第一歩であり、またこれが「自利利他」に結果的に結びつくのかもしれませんが。

## 「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一

環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(若松 正晃)



西教寺境内(滋賀県)

## 第 24 回卒業生インタビュー

話し手：藤田 達也（ふじた たつや）（徳島県）藍住町立藍住東小学校 教諭／寂光山願成寺 副住職／平成 28 年 3 月 教育学部教育学科中学校英語・小学校コース卒業  
聞き手：奥羽 充規（和の精神Ⅰ・Ⅱ導師、国際コミュニケーション学科准教授、本欄編集）

### 仕事について

大学卒業後は、堺市で小学校教諭として5年間働きました。その後、結婚を機に妻の地元へ転居し、小学校教諭を続けましたが、妻の実家のお寺を将来的に継ぐことを決心し、一度小学校の現場を離れました。修行道場での生活を経て、私は現在、平日は小学校教諭、休日はお寺で副住職をしています。小学校は、児童理解に保護者対応、授業準備や採点等、日々の業務はまさに激務ですが、やりがいに満ちています。私が小学校教諭の面白いと感じるところは、同じ授業の繰り返しがない一発勝負なところだと思っています。どれだけ真剣に取り組んでも「今日の授業は100点だった」と思える授業ができることはありません。今でも覚えているのが、授業に自信が付き始めた4年目の時、教育委員会の方が私の外国語の授業を参観に来られたことがありました。入念に授業準備を行い、「上手くいった」と感じていましたが、授業後に一言、「授業はテンポが良かったが〇〇さんが授業についてこられていなかった」と言われ、満足していた授業が自己満足だったことを思い知らされました。悔しかったです。その日から、「**どんな授業をしたいか**」ではなく、目の前の子どものために「**どんな授業が最適か**」を毎日模索しています。失敗の中にこそ学びが存在しているので、日々学びを見落とさないことがとても大切だと思います。

お寺の方では主に三回忌や七回忌といった年忌法要をさせていただいています。年忌法要の際、小学校教諭として鍛え上げた「噛み砕いて話す力」を活かし、相手に分かりやすい法話をするのを心がけています。私は仏縁あって、副住職をさせていただいておりますが、「小学校教諭を経験した、魅力溢れる唯一無二の僧侶」になれるよう、日々の学びを見落とさず活かしていきたいと思っています。

### 和の精神について

大学入学直前に父を亡くすまで、自分の家系が仏教徒であることも知りませんでした。しかし、1回生の時に四十九日や一周忌で家にお坊さんが来られていたので、仏教は身近な存在になっていました。そんな私が一番印象に残っている授業はやはり「仏教」の授業です。入学当時は「木曜日はスーツか」と思う程度でしたが、立派な大講堂で授業を受け、般若心経を唱え、写経をする内に「仏教が今の時代まで受け継がれてきた理由」が少しずつですが理解できるようになってきました。四苦八苦のお話は今でも印象に残っています。父の死もあって、死を身近に感じていた私は、「生老病死の四苦はお釈迦様がこの世におられた 2500 年前も、今の時代の私たちも同じである」というお話を聞き、それまでお釈迦様や聖徳太子は遠い存在だと思っていましたが、現代の私たちと同じ悩みをもった同じ人間であり、何故か悩みが軽くなったのを覚えています。そしてお釈迦様の教えや聖徳太子が重んじた仏教が、今の私に心の安心を与えてくれています。また、「瞑想」も4回生の頃には1分間心を無に近い状態で行えるようになり、教員採用試験の当

日も試験直前に当たり前のように行っていました。当時は気づきませんでした。私たちにあって役に立ち、大切だからこそ、仏教の授業や瞑想はあったのだと、今振り返って改めて感じました。



### 学園訓について

「四恩に報いよ」は在学中に心に残った学園訓のひとつです。現在私自身も父となり、四恩の1つである「父母の恩」は当時よりも身近になってきたわけですが、四恩について考えることは、「今の自分があるのはどうか」と考えることだと思っています。父母あっての私あり、父にも父母があり、母にも父母がいる、私たちはご先祖様からのバトンを受け継いで生きています。自分が何者であるか、誰に支えられてきたかが分かった時、私たちはその恩に報いることが大切であると思います。つまり、恩返しが大切だということです。私は18歳で父を亡くし、恩返しができなかったように思います。恩を返したい相手が生きているとは限らないことを、身をもって感じました。「なぜもっとこうしなかったのか」と何度も悔やみました。私たちは日々の生活の中で、恩に報いることを忘れがちになります。そこにいて当たり前だと錯覚してしまいます。親元を離れて生活をしている学生さんは、離れてこそ分かる有り難みがあるかと思います。生きていくうちに恩に報いたいものですね。

### 在学生へのアドバイス

私は学生の皆さんには「旅すること」を薦めます。マスク生活が明け、通常通りの生活に戻りつつあります。ぜひ旅に出てください。それも行ったことのないところへ。やったことのないこと、行ってみたいところへ行ってみてください。「百聞は一見に如かず」です。私は大学生になったらダンスをしたいと思っていました。学生時代、学生運営委員会ダンス企画班でフラッシュモブやダンスパーティー、DJもしました。班長も務め、その経験は今の仕事にも結婚生活にも活かしています。また、海外ボランティアに興味があったので、カンボジアのスタディツアーに参加し、「にょんにょん」という学生国際協力団体に所属していました。その時感じた教育の重要性や食べ物への有り難みを毎年、学級の子供たちに話しています。憧れていたアメリカへ語学留学にも行きました。人生最大の挫折を経験しましたが、学びを活かして小学校の外国語担任をしています。一生懸命生きていけば、人生で無駄なことは何一つありません。どんどん旅をして、自分の、自分だけの経験を積み重ねてください。**経験者の言葉は、必ず他人に刺さります。**旅をする時間がないと言う人がいるかと思いますが、時間は作れます。全部自分次第です。よく、僧侶になった私は変わり者のように思われることがあります。しかし、他の人がしていない経験をしていると思うのでしょうか。人生は一度きりですよ。

## 令和5年度 冬学期「和の精神Ⅱ」講話一覧

9月21日	仲谷 和記先生 藤谷 厚生先生	「写経の効果」 「冬学期授業について」・「ウパーヤについて」	12月14日	矢羽野 隆男先生	「学園訓『和』について」
9月28日	福光 由布先生	「写経の仕方・作法」	12月21日	亀井 縁先生・学生 杉中 康平先生	「国際看護フィールドワークの学びについて」 「学園訓のエピソード入力について」
10月5日	上野 舞斗先生	「卒業生インタビュー」から考える「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の意義	12月28日	明石 英子先生・学生 学芸員課程修了予定者	「短期学部 保育科 6つの探究」 「2023年度学芸員課程修了予定者による学内展示」
10月12日	奥羽 充規先生	「写経について」	1月4日	中田 貴真先生 李 美子先生	「和の精神 一花と暮らす」 「仏教の伝来ー日中味噌文化の融合」
10月19日	南谷 美保先生	「写経と『経供養』」	1月11日	山崎 達枝先生 須原 祥二学長 藤谷 厚生先生	「四天王寺の舞楽装束の美ー動物たちも踊ってるねん!!!」 「和の精神 一花と暮らす」 「令和6年能登半島地震での被災者支援について」 「～日本 DMORT メンバーとしての活動報告～」 「終講にあたって」 「まとめ」
10月26日	上續 宏道先生	「聖徳太子と福祉の心」			
11月9日	藤谷 厚生先生	「聖徳太子の教えと言葉」			
11月16日	グローバル教育センター (学生・奥羽先生)	「カナダビクトリア大学への長期留学から学んだこと」			
11月30日	若松 正晃先生	「"Pilgrimage" とお遍路」			
12月7日	和田 良彦副学長	「人権について」			

# 聖徳太子ゆかりの地をめぐる

## — 當麻寺(奈良県葛城市) —

當麻寺は、奈良県葛城市にある真言宗・浄土宗二宗のお寺です。近鉄南大阪線・當麻寺駅から徒歩約15分の、二上山の東麓に位置します。その由緒は、推古天皇二十年(612年)、聖徳太子の弟・麻呂子王が太子の教えを受けて、河内国に建立した方法藏院に遡ります。その後、麻呂子王の孫にあたる當麻国見が役行者の領地寄進を受けて、現寺地に遷造し、天武天皇九年(681年)に金堂にご本尊として弥勒菩薩像(国宝)をお祀りして、現代の當麻寺が始まったとされています。なお、現在もそのお姿を金堂で拝むことができます。ご本尊の周囲を四天王が守護しており、そのうち持国天像、増長天像、広目天像の3体は、日本最古の乾漆像として有名です。金堂に続いて、講堂、東西両塔、千手堂(曼荼羅堂)などが竣工され、徐々に寺容を整えていきました。特に東西両塔が現存しているのは貴重で、白鳳・天平時代の伽藍様式を今に伝えています。重厚で力強い東塔と、穏やかで優美な西塔の対比はたいへん素晴らしいものです。



當麻寺 本堂

このように當麻寺は弥勒仏のお寺として創建されましたが、いつしか中将姫のお話と曼陀羅で有名なお寺となりました。中将姫は今から1300年ほど前、奈良時代に右大臣・藤原豊成の娘として生まれます。実母の死後、継母に疎まれ山中で殺害されそうになりますが、中将姫は命を長らえ、その後、當麻寺で出家します。ある日、中将姫の前に、観音菩薩の化身が現れ、お告げを仰られました。そして中将姫はお告げの通りに蓮の茎から糸を紡ぎ、その糸によって一晩にして曼陀羅が織りなされました。これが當麻曼陀羅(国宝)です。當麻曼陀羅は秘仏ですが、その転写を曼荼羅堂や宝物館、奥院で拝むことができます。この當麻曼陀羅の前で瞑想したこと知られているのが、

空海(弘法大師)です。空海は曼荼羅から感得した教えを当時の當麻寺の中院(中之坊)院主に授け、これ以降、當麻寺は真言宗の寺院となります。また、鎌倉時代には、この曼陀羅の説話が広く流布し、曼陀羅堂が本堂と呼ばれるようになりました。當麻曼陀羅信仰が盛んになる中で、浄土宗の僧徒も住みはじめます。これが真言宗と浄土宗の二宗を奉じている理由です。

當麻寺には、中心伽藍、中之坊のほかに、奥院もあります。奥院は當麻寺の中心伽藍の奥(西側)に位置しています。奈良盆地の最も西に位置する當麻寺のさらに西方には古代より極楽があると信仰され、実際、聖徳太子や推古天皇の墳墓は山を越えたところ、大阪府太子町に造られています。奥院は、今から600年前、京都の浄土宗総本山知恩院の奥院として開かれました。桃山時代に建てられた當麻寺奥院の本堂は御影堂と呼ばれ、中には奥院のご本尊・法然上人像(秘仏)や、宝冠阿彌陀如来像などが安置されています。奥院には、本堂のほか、大方丈、楼門、阿弥陀堂など伽藍を残し、宝物館には貴重な文化財を収蔵しています。



當麻寺奥院 浄土庭園

奥院楼門から西に進むと、浄土の世界が目前に広がります。浄土庭園です。二上山を背景に、四季の花が色を添える、美しい庭園です。

今回の取材を通じて、中将姫の物語と曼陀羅信仰、當麻寺の建物の位置関係からわかる古代の宗教観など多くことを学ぶことができました。お寺に直接足を運び、実際に仏像や、建物、景色そのものを見て、感じられるものもありました。是非、皆様も當麻寺を訪れて国宝と美しい庭園を見ながら、中将姫と當麻寺の歴史について学んでみてください。

(学生編集員 峯 萌々花)

## 仏教のことば

### 会釈

長く続いたコロナ禍での自粛生活からようやく開放され、多くの人と対面で出会い、自然にあいさつをする機会も増えてきたのではないかと思います。その時に軽く頭を下げる会釈も、実は仏教のことばなのです。

お釈迦様は「対機説法」といって、相手の性格や能力、事情や背景などをふまえて、それぞれにふさわしい方法でわかりやすく教えを説かれました。その為、その教えの内容には様々なものがあります。

一見すると矛盾しているように見えるものもありますが、そのような事情

をふまえ、一度根本に立ち返り、その教えの内容の相違について照らし合わせ、掘り下げながら、その真実の意味を統一的にわかりやすく明らかにすること、これを「和会通釈」といいます。「会釈」はその略語です。また、「会通」という言い方もします。

その後、このことばは、お互いの意見の調和を図ったり、相手との関係を上手に保つべく、その心を推しはかって対応するような使い方で用いられるようになり、現在のような「簡単なあいさつ」や「軽く礼をする」などの意味になったとされています。

日頃の生活の中で、今まであまり面識のなかった人に話しかけるのは、なかなか行いにくいことかもしれませんが、会釈をすることは、今後、その人とのよりよい人間関係を築くことにつながるかもしれません。

会釈をきっかけにして、これからのさまざまな出会いや縁を大切にしたいものです。

(上續 宏道)

## 編集後記

今号では、看護実践開発センター長・看護学部長の山崎尚美先生に「認知症とともに生きる」、小川浩二入試・広報課長に「大学時代に学んだこと」と題してご執筆いただきました。山崎先生は認知症ケアの多角化を見据えたご自身の活動と大学教育への抱負を、小川氏は広報活動への姿勢を語られています。文学部国際コミュニケーション学科の上野舞斗先生には「学園訓『誠実』について」と題してご寄稿いただきました。内容からも、先生の誠実なお人柄が垣間見られるエッセイです。また、卒業生インタビューでは、藍住町立藍住小学校教諭(徳島県)であり、寂光山願成寺の副住職としても活躍されている藤田達也さんに、ご自身の経験を語っていただき激励の言葉をいただきました。「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」では、学生編集員の峯萌々花さんが、奈良県葛城市にある當麻寺を丁寧にレポートしてくれています。奥院にある浄土庭園に興味を惹かれます。仏教のことばとして、上續先生からは「会釈」をご紹介いただきました。会釈を疎かにしてはいけないことを改めて教えていただきました。

皆様のご尽力により、この度もUPAYAが発行できました。本学に関わる様々な方からお寄せいただいたエッセイからも、本学の「和」を感じることができることでしょう。(若松 正晃)

### 研究所員紹介

所長 須原 祥二(学長・教授)

主任研究員 藤谷 厚生(教授)

### 研究員

上續 宏道(教授) 杉中 康平(教授)

南谷 美保(教授) 矢羽野 隆男(教授)

奥羽 充規(准教授) 中田 貴真(准教授)

李 美子(准教授) 上野 舞斗(専任講師)

坂本 光徳(専任講師) 若松 正晃(専任講師)

客員研究員 桃尾 幸順

(職位・五十音順)

### UPAYA(ウパーヤ) 24号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和6年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPAYA(ウパーヤ)」に関する  
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。  
E-mail | bukken@shitennoji.ac.jp  
(件名は「ウパーヤ」としてください)

